

核兵器の非人道性：ウィーン会議に出席して

中村 桂子

2014年12月8日から9日にかけて、オーストリア政府主催の「核兵器の人道上的影響に関する国際会議」がウィーンで開催された。2013年3月のオスロ(ノルウェー)、2014年2月のナヤリット(メキシコ)に続く3度目の会議である。参加国は第1回、第2回を上回る158か国にのぼり、5つの核兵器国から米国、英国が初参加した(他の核保有国としては、インド、パキスタンが出席、イスラエル、北朝鮮が欠席)。国連機関、赤十字国際委員会、NGO・アカデミアからも多くの出席があった。会場となったホーフブルグ宮殿内の大広間は熱気と人で溢れ返り、入りきれない参加者がモニターで同時中継を見るための別室まで設けられるほどであった。

●戦略的なオーストリア

昨今の非人道性への焦点化は、その論理的帰結として「核兵器の法的禁止」を求める国際世論の高まりへとつながってきた。前回の主催国メキシコは、「核兵器の人道的影響に関する広範かつ包括的な議論は、法的拘束力のある条約を結ぶことを通じて、新たな国際基準及び規範を実現すると、政府及び市民社会の誓約につながっていかねばならない」と総括し、「行動すべき時が来た」と外交交渉の開始を訴えた。メキシコの前向きな発言は多くの同志国家や市民社会の歓迎を受け一方で、法的議論を嫌う国々の警戒心を増幅させることにもなった。

こうした状況を背景に、オーストリアの姿勢は一貫して慎重かつ戦略的であったと言える。会議が外交交渉の場でないことを繰り返し明言し、核保有国を含めた広範な参加を呼び掛けると同時に、新しい分野に踏み込んだ意欲的な会議プログラムを組み立てた。4つのセッションでは、過去2回の会議の主たる論点であった核兵器爆発や核実験による影響、故意あるいは偶発的な核兵器使用のリスク、核兵器使用時の対応能力についてさらなる証拠が示されたが、あわせて、これまで触れられなかった核抑止政策に内在するリスクの問題も取り上げられた。さらには、国際環境法、国際保健法を含む既存の国際法に基づく規範に照らして核兵器の非人道性があらためて議論された。これらは、4か月後に控えたNPT再検討会議を視野に、国際社会のさらなる分断を回避しつつ、核兵器の法的禁止に向けた議論に資することを狙ったものと言えよう。このようなオーストリアの戦略的姿勢は、立場の異なる国々に配慮を示した「議長総括」や、後述する「オーストリアの誓約」の2つの文書にも表れていた。

●対立を乗り越える提案

セッションに続く一般討論では、100を超える政府、国際機関、市民社会の諸団体が発言を行った。非同盟諸国(NAM)を中心に核兵器禁止条約の交渉を求める声が続く、米英を含む核保有国や「核の傘」国家の多くからは、「ステップ・バイ・ステップ」や「ビルディング・ブロック(ブロック積み上げ)」アプローチの有効性が強調された。後者の国々からは、「(核軍縮に)近道はない」「人道面とともに安全保障の面も考慮すべき」「戦略的安定性を損う」など、現在の潮流を危惧する発言が相次いだ。

加えて、各国の発言には、こうした積年の対立構造をのりこえるための具体的提案も数多く盛り込まれた。来る再検討会議



会議場内の様子 2014年12月8日 撮影:RECNA

において、

NPT第6条の求める「効果的な措置」の選択肢を検討するよう呼びかけた「新アジェンダ連合」(NAC)(ブラジル、エジプト、アイルランド、メキシコ、ニュージーランド、南アフリカ)提案はその一つである。NACは、2014年のNPT再検討会議第3回備委員会に提出した作業文書において、「核兵器禁止条約(NWC)」をはじめとする法的枠組みのいくつかの選択肢を示し、同年秋には、そうした選択肢を再検討会議にて検討することを求めた国連総会決議を可決させている。このほかにも、スウェーデンは、核兵器のない世界の達成に向けた「国連作業部会」の再活性化を呼びかけ、キューバなどは、禁止条約交渉の場として2018年までの開催が決定している「国連ハイレベル会議」の活用を呼びかけた。

●オーストリアの「誓約」

「議長総括」につづき、主催国オーストリアが読み上げたのは、異例ともいえる「オーストリアの誓約」と題する文書であった。オーストリアは、それが会議を通じて得た「避けたい結論」であるとし、「来る2015年再検討会議を含めた可能な場において」「関心ある国々とともにこれらを推進する」意向を示した。

注目すべきは、「誓約」が、「核兵器の禁止及び廃棄に向けた法的な溝(欠けている部分)を埋めるための効果的な諸措置を特定し、追求すること」をすべてのNPT加盟国に求めた点である。次のNPT再検討会議において、第6条の要求する「効果的な措置」の在り方について選択肢を検討していくという方向は前述のNAC提案と軌を一にするものであり、条約交渉を時期尚早と主張している国々を含めて議論を前進させようのものである。2014年末現在、この「誓約」が今後どのように使われていくかは必ずしも明らかでないが、日本を含めた消極的な国々をいかに巻き込んでいくかが次の焦点となっていくことは間違いない。

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

2014年11月5日、米国NGOの「憂慮する科学者同盟(Union of Concerned Scientists: UCS)」の中国核問題の専門家であるグレゴリー・カラーキー博士が長崎を訪れたのを機に、RECNA研究会にて「中国の核戦略; 米国との対話と日本の役割」と題して講演をしていた。その後意見交換を行った。カラーキー博士は、20年以上もの中国滞在経験をもつ、米国きっての中国専門家、中国にも多くの知己・友人を持つ。その情報網と人脈から得られる知見は信頼性が極めて高いと思われるが、一方で中国の考え方に偏っているのではないかと、との批判も受けてきた。しかし、UCSにおける氏の活動は、中国の核政策を理解するうえ米中のみならず、世界の核政策専門家にとって、非常に有益な影響を与えてきたことは疑いがない。

今回の講演では、中国核戦略の近代化について、米国で誤解されている点について詳しい説明があった。米国では、最近中国が「最少核戦力保持」「先制不使用」政策から拡大戦略に変わろうとしている、との説明がなされるようになった。しかし、それは中国語の誤訳や信頼できない情報源に基づいているものであるとの解説が丁寧になされた。具体的な事例として、1995年のAlastair Johnson論文(International Security)や2009年のMichael Chase, A. Erickson, & C. Yau論文(Journal of Strategic Studies)を挙げ、それらの論文の根拠となっている軍の報告書は一般に公開されているものでもなく、また外国向けの書物ではないもので、翻訳の精度が確認できないと指摘した。2003年、2007年に発表された最も権威ある軍の報告書によると、中国が長年維持してきている「先制不使用」政策、「最小規模の核戦力の維持」という政策に変化はない、という。

別の事例では、2011年1月に報じられた「中国の先制不使用政策が変化」というニュースについて、その情報源となった論文がいずれも信頼性が低く、しかも論文の中の情報も誤解や誤訳に基づく明確な誤りが散見されるとし、否定的な見解を示した。そして、そのような信頼できない情報源にもとづいた分析から、信頼できる結論を導くことは不可能であるとし、中国の核政策に関する米国での研究の現状を批判した。

これらの事例から、カラーキー博士は、他国の戦略を知るには、言語の壁を乗り越えることが重要であり、誤訳や不正確な解釈に基づいて政策を決定することは極めて危険である、と述べた。また、どの情報源が信頼できるかに



カラーキー博士 RECNA会議室
2014年11月5日 撮影:RECNA

についても、国外からでは判断ができないことも多く、対象となる国の国内に信頼できる情報源を持つことの重要性を強調した。

ただ、このような問題が起きるのも、中国の政策に透明性が全くないからであり、中国にとっても透明性を高めることは意義があり、中国も透明性の向上に努めるべきであるとの点もカラーキー博士は指摘した。米中戦略対話は軍レベルでも行われているが、中国側から有益な情報が提供されることはほとんどなく、これが上記のような誤解や間違いを誘発する背景となっていると述べた。

最後に、現在カラーキー博士が行っている活動の一つとして、米国核兵器の即時発射体制を解除する「警戒態勢の解除(de-alerting)」について説明があり、この点で日本の役割が極めて重要であると述べた。広島で開催された2014年5月の「軍縮・不拡散イニシアティブ(NPDI)」声明において、明確に「警戒解除」を提言しており、この点を評価する見解を示した。核兵器の「警戒態勢の解除」は、核戦争のリスクを下げるのと同時に、核兵器の役割低減にもつながるもので、その推進に対し、非核保有国で同盟国である日本が声を上げることが、大変大きな影響力を持つことになる、との主張であった。

(すずき たつじろう、RECNA副センター長)

被爆体験を伝える

お世話になった被爆者の消息を久しぶりに知り合いやご家族に尋ねると、「それがね…」という答えを聞くことが多くなった。亡くなった、あるいは生きていらしても、お話を聞けない状態になっている…。可愛がって頂いた方の訃報を新聞で知ることもあった。被爆者の高齢化を切実に感じる。まだ戦争体験者の声を直接聞くことのできる今は、被爆者の語りとその「継承」をめぐる問題を語りが生まれる現場で観察し、検討することのできる最後の機会でもある。

長年にわたって、被爆者は体験を語り継いできた。その形の一つに、「証言」がある。辞書で「証言」という言葉をひくと、「言葉である事実を証明すること。証人として事実を述べること。また、そのことば。」とある。もともと、法廷で使われる用語だったが、転じて戦争体験を証言するという形でも使われるようになった。「証言」と括られる対象は書くことから話すことまで幅広いが、その一つに、被爆者が直接聴衆に向かって体験を語る「被爆体験講話」*がある。一昨年、長崎原爆資料館には約64万3千人の来館者があり、このうち修学旅行生を中心とした約17万3千人が長崎平和推進協会所属の被爆者の被爆体験講話を受けている。同様の講話は、広島でも広島平和記念資料館を始めとする複数の団体が組織的に行われており、これまで多くの人々が、修学旅行や学校の平和学習によって、被爆者の語り

被爆体験を語り継ぐ場

四條 知恵

に触れてきた。学校教育の中で行われる被爆体験講話は、家族から聞く戦争体験と並び、いやそれ以上に被爆体験を語り継ぐ主要な場となってきたと言える。

確かに、これまで被爆体験講話は、体験を持たない人々の多くが直接体験者の語りに触れる貴重な機会を提供してきた。しかし、被爆体験講話により多くの人々に体験を当事者から聞く貴重な機会が与えられてきた一方で、限られた時間の中で、一人が多数に語るといった講義スタイルで「大切」な体験を拝聴するというこの制度は、画一的で様式化した語り方を生み出すことにもなった。分かりやすく被爆体験を伝えようと心を砕く被爆者は、その中で、「言葉が心に届かない」という問題に葛藤することになる。壇上から何百人もの聴衆に向かって自分のパーソナルな体験を語る…これは、知り合いや家族から戦争体験を聞くといった状況とは異なる、特殊な戦争体験の語り方である。学校の授業の一環だから、講話中に友人と語り合うことは、なかなかできない。耳慣れない言葉を疑問に思っても、会場で話をさえぎって質問するにはハードルがある。限られた時間の中で、個人的にゆっくり話を聞くことも難しい。被爆体験は、静粛な会場の中で、襟を正して聞かなければならないものである。

私自身、原爆被害をテーマに研究を続ける中で、多くの被爆者の

方のお話を聞く機会があった。戦時中で満足な食べ物になかったこと、原爆が投下された時の状況、大切な家族がどんな様子で亡くなっていったのか、自分がどんな傷を負って生きてきたか…多くは、辛く、悲しい話である。ただ、その中であって楽しそうに、また懐かしそうに、生き生きと語られる情景がある。「あなたは知らんかしらんが、ここにはこんな建物があつてのう…」「ここではよく子どもたちが川遊びをしてねえ」「いけんかつたけど、こつそり映画を見たことがあるんよ」。時折、柔らかな表情の語り手のお話を聞く中で、まるで昔の町が目の前に立ち上がってくるように感じる時がある。それが、聞き取りをする醍醐味であるとともに、

私にとって原爆被害を知るということでもあった。

「被爆体験講話」という制度を離れて、語り手と聞き手が、世代を超えて気軽に話し合えるような場を作ることができないだろうか。被爆地の長崎だからこそ、核問題を考えるサポーターの集まるRECNAだからこそできる新しい被爆体験を語り継ぐ場を作ってお手伝いをするのであれば、と考えている。

* 被爆体験証言、平和学習、修学講習などとも言う。

(しじょう ちえ、RECNA客員研究員)

ナガサキ・ユース代表団

ナガサキ・ユース代表団第3期生が決定

二次にわたる選考を経て、12名(うちOB/OG枠3名)がナガサキ・ユース代表団第3期生として選出されました。4月末からのニューヨーク国連本部でのNPT再検討会議参加に向け、さまざまな準備活動を開始しています。今号と次号にわたってメンバーの抱負を紹介します。

●天野貴暢(長崎大学大学院工学研究科博士前期課程)

核兵器という物を一度、真剣に考えてみたいと思ってこの代表団に応募しました。

小中学校で原爆の事については学びましたが、現代の核兵器に関する取り組みに関しては全くの無知でした。代表団のポスターをみて核兵器の事が少し気になり、インターネットで調べてみると、我々の安全に関わるとても重大な事だと気づきました。またその核兵器が国家間の交流を左右する大きな一つの要因でもあるのです。

そこで、今回この代表団の取り組みを通してもっと知り、もっと大きな気付きがあればいいなと思っています。

●荒倉由佳(長崎大学医学部医学科2年)

私はこの4月に長崎大学に編入しましたが、以前の大学では国際関係学を専攻し、その一分野である非核化や平和も学問として触れました。しかし学問を離れた今、「核兵器問題をどう捉え、周りに伝えるべきか」「正しいことを正しい、間違いを間違いだというのは大事なActionだけれど、それだけでは人は動かないのではないか」という疑問が強くなっていました。そこに自分なりの答えを見出したくて、また初めから学び直したいと思っています。そして曲がりなりにも答えが見いだせた時、非核化への賛同を得るために、初めて身近な友人や知人に対して自分なりのstoryが語れるのかな、語れるようになりたいなと思っています。

もうひとつは、共に高め合える仲間づくりです。正直、核兵器問題や平和という分野は仲間が作りづらいフィールドだと私は感じます。それは分野の性質上、堅い話が多く取っつきにくかったり、逆に日々平穩であることが当たり前すぎたりと、結局自分とは関係ないと思える故だと思えます。実は私自身も、以前の大学を卒業後一社会人として過ごした日々では、関心が薄れていく自分がいました。だからこそ、仲間が大事だと確信しています。まずは12名の第三期生と共に歩み始めます。そしてその輪をもっと広げていきたいです。そうすることで、少しずつだけれどよりよい未来に近づけるのだらうと信じています。

●稲垣歩海(長崎大学多文化社会学部1年)

私は小中学校の9年間は和歌山県、高校3年間は愛知県で過ごしました。自分にはない価値観や考え方を学べることから、外国に興味を持

ち高校はパナマへ1年間行き、大学ではオランダのライデン大学へ留学出来ることから長崎大学の多文化社会学部オランダ特別コースに入りました。長崎に来てから記念式典を訪れたり、授業を受ける中で核問題について意識することが自然に増え、自分から学びたいと思うようになりました。今回3期生代表団の一員としてNYに行けるということで、核廃絶に対する各国の姿勢や考えを知ることはもちろん、ユースのメンバーや海外の学生との交流を通して核問題に対する自分にはない様々な考え方を見ることが出来ることを期待しています。そして、将来外国と関わる仕事をする上で根底にあるべき「平和」という概念について自分の中でしっかりとした意見を持ち、何か発信出来るようになりたいと考えています。

●川崎真由(長崎大学薬学部2年)

生まれは小倉。長崎ではありません。

2年前まで核問題に関しては、小倉が標的だったこと以外、教科書レベルの知識しか持ち合わせていませんでした。そんな私は出島から西洋薬が入ってきたので薬学部なら長崎かな?という単純明快な考えで、ここ長崎にやって参りました。そして受験時に見たナガサキ・ユース代表団第1期生のポスターとI'm from NAGASAKI.の後に何を聞かれると思いますか?という問いに影響され、現在RECNAの教養教育を受講しています。また、去年からはRECNAサポーターとしても活動しています。

現在の課題は、いかにこの問題を“国民的、国際的議論”にできるか、だと認識しています。そのためにも、いろんな人と様々な形でこの問題と向き合っていきます。どうぞよろしくお願いします。

●河野早杜(長崎大学環境科学部2年)

私たちの世代は戦争を経験していない…。

しかし、長崎県出身の同世代の友人たちは8月9日に平和・核廃絶に向けて多くのことを語り、行動していることに心を打たれました。地域によってこんなにも意識の違いがあることも痛感しました。世界を見てみれば、戦争は留まることを知らず、核保有国は治まるどころか増える一方で、「いつ核戦争が起こり、いつ核の脅威を再び与えかねない」状況にあります。核兵器は一瞬で命を奪い、生きている人に対してもその影響から逃れることが出来ない非人道的大量殺傷破壊兵器です。NPT会議が行われる2015年の年は、被爆70周年です。世界も注目しているこの会議で、私たちが核廃絶に向けて躍動し、長崎で学んでいることに誇りをもって、全世界の核の脅威から解き放てるよう励んでいきたい。

「将来は若者が作り、将来は若者が世界を変えることが出来ます。」

RECNAの活動

2014年10月1日～2014年12月31日

- 10月8日(水) ■核兵器廃絶長崎連絡協議会総会 RECNA会議室
- 10月13日(月) ■韓信大学スタディツアーRECNA訪問
～10月16日(木)
- 10月18日(土) ■第1回ナガサキ・ユース代表団三期生募集説明会
- 10月24日(金) ■第2回ナガサキ・ユース代表団三期生募集説明会
- 11月1日(土) ■平成26年度核兵器廃絶市民講座
第4回「いま、政府の役割と市民の力」
講師:梅林 宏道(RECNAセンター長)
- 11月2日(日) ■対馬高校にて平和学習講座(梅林センター長)
～11月4日(火)
- 11月5日(水) ■第20回RECNA研究会
テーマ:「中国の核戦略;米国との対話と日本の役割」
講師:グレゴリー・カラーキー氏(憂慮する科学者同盟)
- 11月7日(金) ■Peace & Green Boat と RECNAサポーター交流会
- 11月19日(水) ■広島市立大学広島平和研究所-RECNA年次意見交換会
RECNA会議室
- 11月19日(水) ■ハンギョレ平和研究所・釜山シンポジウムに参加
～11月20日(木) (梅林センター長)
- 11月24日(月) ■ナガサキ・ユース代表団第三期生二次面接
- 12月8日(月) ■第3回「核兵器の人道上的影響に関する国際会議(ウィーン)」
～12月9日(火) に参加 (朝長客員教授、中村准教授、RECNAサポーター)
- 12月9日(火) ■金大中記念図書館「非核化シンポジウム(ソウル)」に参加
～12月10日(水) (梅林センター長)
- 12月11日(木) ■米デュポール大学生と RECNAサポーター交流会
- 12月13日(土) ■バグウォッシュ会議ワークショップ(ローマ)に参加
～12月14日(日) (鈴木副センター長)
- 12月17日(水) ■アラン・ウェア(PNNDグローバル・コーディネーター)と RECNA
サポーター交流会
- 12月18日(木) ■ナガサキ・ユース代表団第三期生記者発表
- 12月19日(金) ■学生イベント 西前 拓氏『「アート×平和」で何が出来る?』
(RECNAサポーター)
- 12月20日(土) ■平成26年度核兵器廃絶市民講座
第5回「原爆の絵に見る被爆の記憶」
-講師:四條知恵(RECNA客員研究員)

お知らせ

- 2015年3月7日(土) **平成26年度第7回核兵器廃絶市民講座**
「被爆者の健康を考える」
-講師:三根 真理子(RECNA教授)
-場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
交流ラウンジ地下2階
-時間:13:30～15:30
※事前申込不要/受講料無料

特別市民セミナーシリーズ「2015年NPT再検討会議に向けて」

- ~~・第1回「核軍縮・不拡散の課題と展望-2015年NPT再検討会議に向けて」
-日時:2015年1月21日(水)
-講師:パオロ・コッタ・ラムジーノ(バグウォッシュ会議事務総長)
-場所:長崎大学文教キャンパス内文教スカイホール
(グローバル教育・学生支援棟4階)
-時間:18:00～20:00
※同時通訳有
第1回は講演者の急病により中止となりました。~~
- ・第2回「核の傘と核廃絶に向けて」
-日時:2015年2月5日(木)
-講師:太田昌克(共同通信編集委員、論説委員兼務)
-場所:長崎大学文教キャンパス内 環境科学部A-13教室
(教養教育講義棟1階)
-時間:18:00～20:00
- ・第3回「東アジアにおける核軍縮と軍備管理」
-日時:2015年2月12日(木)
-講師:藤原帰一(東京大学教授)
-場所:長崎大学文教キャンパス内文教スカイホール
(グローバル教育・学生支援棟4階)
-時間:18:00～20:00
- ・第4回「核不拡散と原子力の平和利用-実効性と不平等性の拡大のジレンマ」
-日時:2015年3月15日(日)
-講師:秋山信将(一橋大学教授)
-場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ地下2階
-時間:14:00～16:00

※いずれも事前申込不要/入場無料
※場所がそれぞれ異なります。ご注意ください。



第3巻3号 2015年1月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail. recna@ml.nagasaki-u.ac.jp
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 株式会社インテックス

©2015長崎大学核兵器廃絶研究センター